

子どもの育ちと母親の育児姿勢（2）

—子育て中の母親の意識調査から—

Development of Children and Childcare by Mothers (2)

— An Attitude Survey of Mothers Raising Children —

橋 本 景 子

Keiko Hashimoto

（ 要 約 ）

本調査では、子育て時の母親の意識を調査した。肉体的にも精神的にも重労働である子育て。虐待の加害者が実母に多いことも納得できる。多くの母親が子育てのために頑張っているが、可愛い子どもにも「イライラする、八つ当たりしたくなる、子どものために我慢ばかりしている」という気持ちを持つのはどの母親も同じである。そういう気持ちをもつことがいけないのではなくて、その気持ちを処理できないことが実は問題である。

（キーワード）

母親の意識、子育ての苦しさ、孤独

はじめに

現代は子育てに関する問題が山積している。前年度までは中学生とその母親を対象に親子関係を調査してきたが、その調査結果やカウンセリングの実践から、やはり問題の根源は幼少期の母子関係にあると思われた。子育てに関わる親や祖父母、保育士等、大人の心の安定が子どもの心の安定につながっていくが、中でも、子どもの育ちにおいては母親がどうあるかが重要なキーポイントとなっている。

そこで今回は保育園・幼稚園に通う乳幼児を持つ母親に焦点を当て、母親の育児姿勢とその抱える問題について検討するため、質問紙による調査研究を行った。

「母性愛神話」という言葉が生まれたように、「母性は女性なら誰もが持っているもの」と考えるのが母性社会の日本である。そこでは母性の良い面だけが強調され、世間一般ではまだまだその古い概念に縛られていることが多い。そしてその影で苦しむ母親たちがいるのも事実である。「男女共同参画」という言葉も生まれたように、男女の意識が変化してきたにも関わらず、子育てにおいては窮屈な思いをしている。そこで、現代の母親の本音を調査する必要があると考えた。

夫との関係も大切であるが、外から入ってくる情報量の多さ、あるいは間違った情報、祖父母と子どもとの関わり等、さまざまなものが母親の育児姿勢に影響を及ぼしている。そしてそれがまた子どもの育ちに影響を及ぼしていく。だからこそ母親の心の安定が一番重要である。

本来は「母と子の生活の実態」を知りたいところであるが、昨今ではプライバシーの問題からガードが硬く、幼稚園・保育園においても協力いただける所が少なくなっている。今回の調査に当たっても、調査内容を園長がチェックし断られた所も数件あった。そんなことも予測しながら調査項目を作成していった。

1. 調査について

(1) 目的

乳幼児を子育て中の母親の意識を調査し、若い母親の抱える問題を明らかにする。

(2) 調査対象と回収率

幼稚園または保育園児を持つ母親。

三重県538部配布で382部回収。回収率は71.00%

愛知県300部配布で94部回収。回収率は31.33%

全体で838部配布、476部回収で回収率は56.8%であった。

(3) 調査方法と実施時期

母親用の質問紙調査票を三重県内の3保育園と2幼稚園に、愛知県内の保育園・幼稚園に各1園ずつ配布、回収を行った。実施時期は2008年10月。

(4) 調査内容

未就学児を持つ母親の子育て時の意識調査。自由記述はあるものの基本は選択式。

(5) 作成時の留意点

①筆跡からも回答者を特定できないよう、4尺度の選択式にした。

②ネガティブな質問ばかりが続くと、警戒されたり自分の気持ちはそんなことはないや否定され書き直されたりすることがあると思われたので、項目の並びに配慮した。

③できるだけ差し障りのない答えやすいものを選んだ。

調査を行うにあたり以上のことに留意した。その理由は、小学校や中学校、その他母親に個人面談を行うと、調査の段階では出てこなかったことが語られる、ということを経験してきたからである。心の微妙な問題は慎重に行わないと本音が語られない。

2. 結果と考察

(1) 子どもに八つ当たりをしたくなること

半数を超え、60%近い人が「ある」と回答している。ただし、実際に八つ当たりするかどうかではなく、「したくなること」と尋ねているので、気持ちの問題である。

ここで一番問題となることは、八つ当たりをした方はそのことを忘れてしまうが、された方の子

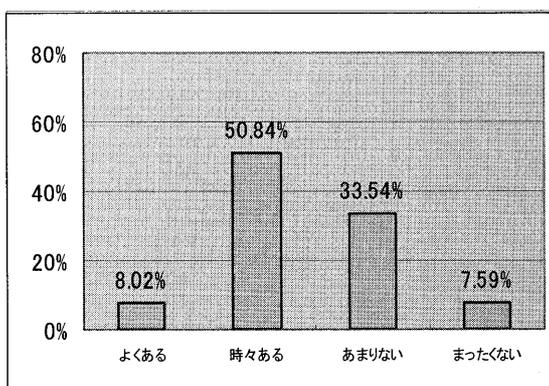


図1-1 八つ当たりをしたくなる

子どもの育ちと母親の育児姿勢（2）

どもの心の隅に、そのことが残ってしまうことである。それなのに大人がそのことに気づかないことが問題である。時には形を変えて心に残るので、大人から「そんなことはなかった」と否定されてしまう。

（2）子どもが煩わしくてイライラしてしまうこと

60%を超える人が「ある」と回答している。そして(1)(2)どちらの項目も「よくある」とした人は10%近くいる。

ここで、保育園児を持つ母親と幼稚園児を持つ母親との意識の違いを比べてみた。他の項目においてはほとんど同じ形を示す棒グラフだったが、この二つの項目に関してだけは違いが見られたからである。

下図1-2と1-3、2-2と2-3の円グラフは、(1)と(2)の質問に対する回答を、保育園児を持つ母親と幼稚園児を持つ母親とに分けて比較したものである。

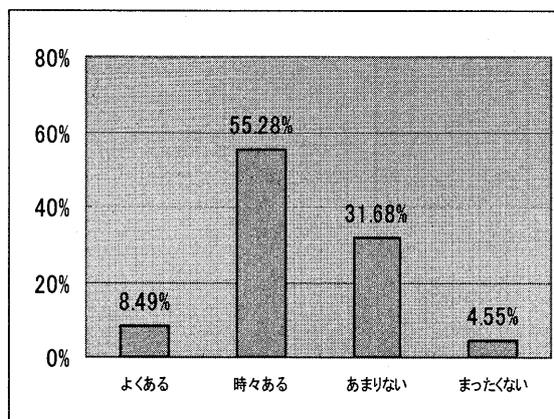


図2-1 煩わしくてイライラする

〈保育園児の母親〉

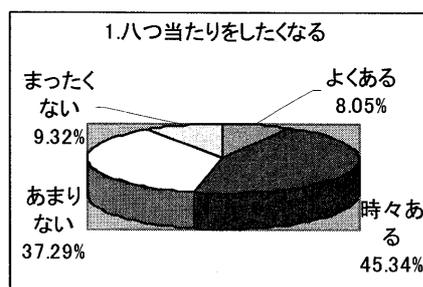


図1-2 保育園児の母親

〈幼稚園児の母親〉

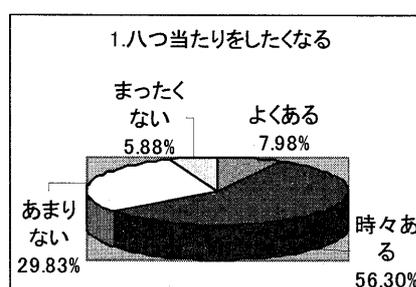


図1-3 幼稚園児の母親

2. 煩わしくてイライラする

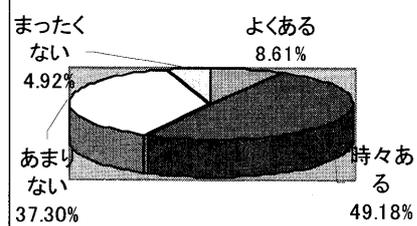


図2-2 保育園児の母親

2. 煩わしくてイライラする

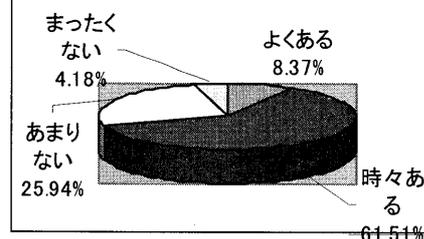


図2-3 幼稚園児の母親

いずれも幼稚園児の母親の方が「ある」という回答が圧倒的に多い。これは保育園児の母親の方が子どもと離れている時間が長いということと関係していると考えられる。つまり、子どもと離れている時間が長いほど、「自分」を取り戻せる、落ち着けるチャンスがあるということだろう。幼稚園児の母親

は専業主婦が多く、パートに出ている短時間である。子どもの降園時間も気になるし短時間ながら仕事に追われることが多い。決して仕事から子育てへの息抜きにはならず、実質上の「働く」「稼ぐ」ということが中心になる。

自由記述欄に「1時間でも2時間でも、子どもから離れられたらどんなに楽か・・・」ということが書かれていた。カウンセリングの中でも母親からよく聴かされる言葉である。しかし多くの母親が、それはできないし、してはいけないことだとどこかで思っているようである。例えわずかな時間、子どもと離れてのんびりしている時でも、子どものことが気になって自宅に電話をかけている姿を何度も目にしてきた。また、母親が友達とおしゃべりなどの息抜き中でも、子どもから電話が掛かってくるが多々あり、子どものことは常に母親の頭から切り離すことができない。

母親たちはこういった精神面の負担を特に夫に「わかってほしい」と思っている。何かを「してほしい」のではなく「わかってほしい」ということである。

(3) 腹が立って思わずカッとなり、子どもに手をあげたこと（手でも足でも）

半数を超える人が何らかの形で暴力（カッとなったものなので、ここでは一応“暴力”と捉えている）を子どもに振るっている。ここには臍として手をあげた、というのは含まれていないと思われる。

「まったくない」という人は1割強しかいない。「あまりない」というのは程度の差こそあれ、またその人が思っている「あまりない」であって、裏を返せば「あった」ということである。

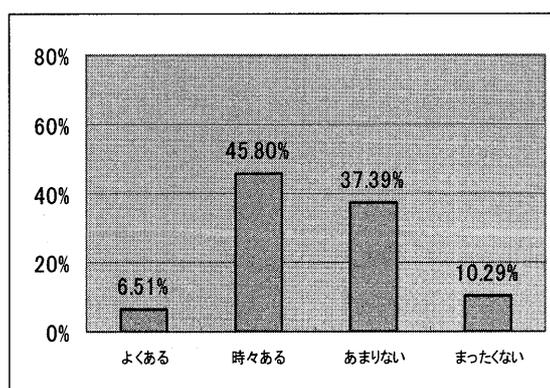


図3 子どもに手をあげたこと

大半の人がカッとなって**思わず**暴力を振るってし

まうことは、子育てが密室で行われていることを考えると当然の結果であろう。これだけ多くの子どもたちが実際に母親から何らかの形で暴力を振るわれている。しかし先にも述べたように、一瞬のことであり、カッとなって暴力を振るったことなど母親も覚えていたくはない。そこで母親の方はこのことを忘れようとする。しかし、子どもの方はそう簡単には忘れられない。

また、子どもへの暴力は夫や祖父母の知らないところで行われることが多い。（時として夫婦で子どもに暴力を振るうこともあるが、それはここで考えている暴力とは別問題である）ここに母子の密接な、そして複雑なつながりが生じていく要因があると筆者は考えている。子どもは、大きくなっても母親の反応に非常に敏感である。その時の恐さ、不安を、母親に対してどこかで持ち続けているのに、無理をして母親のご機嫌を取ったり、母親の意に沿うようにいい子でいようとしたり、母親に「見捨てられないように」頑張っている子どもたちをたくさん見てきた。なぜなら乳幼児期の子どもにとってのすべては、「親や家庭」だからである。まだ他の世界を知らないから、親は頼らざるを得ない存在なのである。

厚生労働省児童家庭局総務課資料によると、子どもへの主たる虐待者件数は実母がもっとも多く、2001年度は63.1%で、実父は22.6%という報告がある。また、実母による虐待件数が年々増加している。

子どもの育ちと母親の育児姿勢（2）

それに対して実父による件数は減少傾向にある。このことから如何に子育てが大変であるかということと、如何に母親の心が安定していることが重要であるかということが推察できる。

また、被虐待児の構成を見ると、これは3年間の資料を見てもほとんど変化していない。しかし未就学児で被虐待の比率が小さいのは、実際に「少ない」ということではなく、自分から訴えることもないし、周囲に気づかれることもあまりないからだと考えられる。私たち大人は、どうも大人の言うことを信じる傾向があるようだ。何度か大人に信じてもらえない経験をした子ども、大人に裏切られた経験のある子どもは、その後も硬く口を閉ざしていくようになる。ここにますます虐待が見えなくなっていく理由がある。

また、ここにあげている数値は一部のものであり、実際はもっと高い数値が示されるものであろう。「優しさ」という名を借りて、いつの頃からか知らず知らずのうちに子どもを母親の思い通りに操っていくのも第三者には見えにくい、当の子どもにとっては耐え難い虐待である。「やさしさ」という名を借りた虐待である。しかし子どもは、親とは家庭とはそんなものだと思って過ごしていつてしまう。

	虐待者		被虐待児童年齢別構成				
	実父	実母	0～3歳未満	3～学齢前児童	小学生	中学生	高校生・その他
2000年度	23.7%	61.6%	19.9%	29.0%	35.2%	11.0%	4.9%
2001年度	22.6%	63.1%	20.4%	29.4%	35.8%	10.4%	3.9%

表1（厚生労働省児童家庭局総務課資料2002年より）

なお、資料は3年分あったがここでは割愛した。

虐待には言葉の暴力、無視という暴力（子どもにとっては「見捨てられ不安」という形で長期にわたって影響を及ぼしていく）、ネグレクト・・・などさまざまなものがあるが、本調査でそこまで立ち入ると回答が閉ざされてしまうことが予測されたので、それは次回の面談調査を待つことにした。

（4）子育てを放棄したいと思うこと

「よくある・時々ある」の総数が「まったくない」を上回っている。正直に言えば、誰でもそう思う瞬間はあるだろう。だからといって実際に放棄するかどうかは別問題である。この項目に対して、「ある」と答えることで母親は自責の念に駆られる。母親に「そう思ったっていいのですよ」と受容すると大半の母親が涙ぐむ。実際「思う」ことがあるからである。こういう調査では、「そう思っている自分がいるとは思いたくない」という気持ちが働き、正確な回答が得られないことがあることも忘れてはならない。

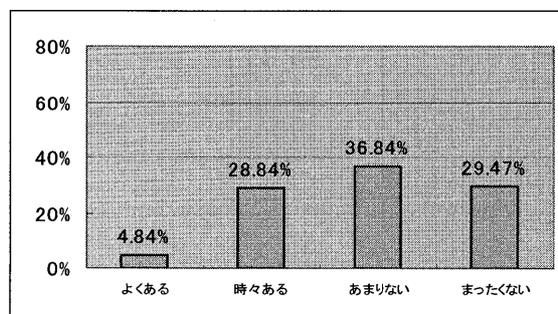


図4 子育てを放棄したい

(5) 子育てをしていて、ふと「淋しい」「孤独だ」と思うこと

グラフを見る限りは少ないように思われるが、実数では20%を超える100人ほどの人がそう感じている。子育てとは「孤独」なものであり、一人で闘っていると感じている母親もいる。子育て支援とはそういう人を支援する場ではないだろうか。しかしそう感じる母親ほど、子育て支援の場に「自分から出向いては行けない」ということを私たちは認識する必要がある。また、「一度は行って見たものの、元気なおかあさんたちに押されてうまく参加できない。」と言う人もいる。そういう人たちから目を離さないようにしたい。大人が大人と関わりを持っていないとき、何らかの形で非常に強い孤独感に襲われるものである。「仲間はずれ」「いじめ」の始まりと同じである。

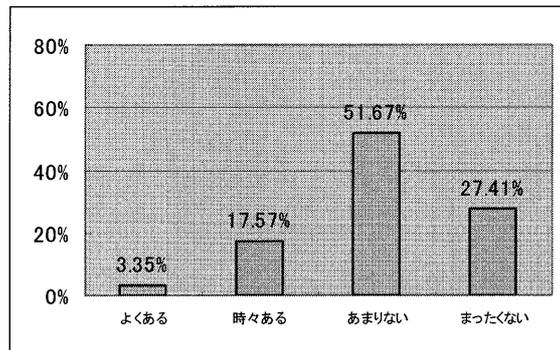


図5 「淋しい」「孤独だ」と思うこと

(6) 子育てによって自分も成長していると感じること

「子育て」はやはり「母親育て」でもある。母子相互作用という言葉があるように、母子ともに育っていくものである。出産や子育てを通じて「我慢」ということを学んだり、自分ひとりで勝手に社会の中で生きているのではないのだということを学んだりするチャンスでもある。90%近い母親が、「自分も成長している」と感じており、子育てから得るものがたくさんあることもわかっているのである。

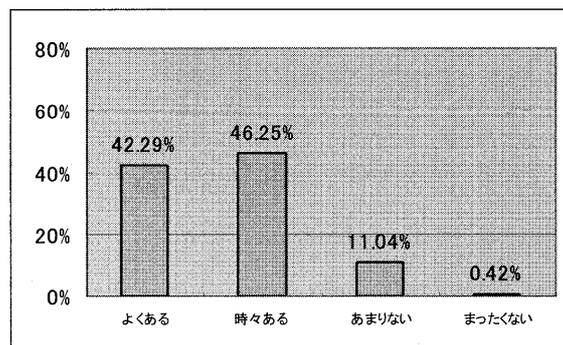


図6 自分も成長していると感じる

(7) 子どもと遊ぶのはとても楽しいと思うこと (8) 子どもを育てるのは楽しくて幸せだと思うこと

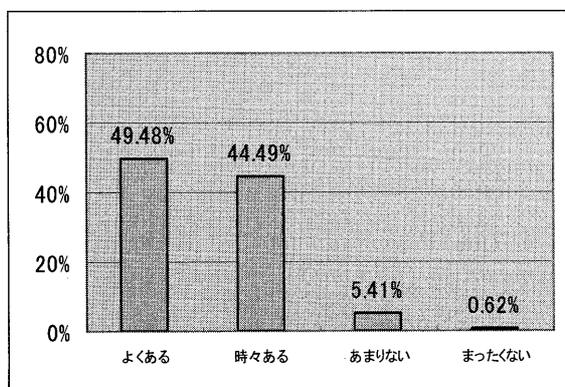


図7 子どもと遊ぶのは楽しい

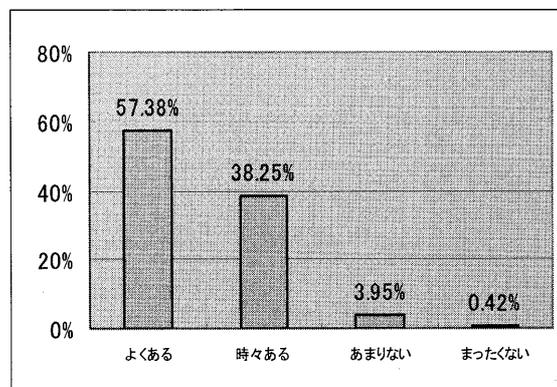


図8 子どもを育てるのは楽しくて幸せ

子どもの育ちと母親の育児姿勢（2）

どちらも約95%の人が「楽しい」と答えている。これも先の(6)に続いて肯定的な回答であった。母親はこうして子育てに楽しみを見つけながら、子育ての楽しさを味わいながら、日々成長していく。こういう気持ちをたくさんの母親が持っているのだからこそ、この気持ちを最大限に引き出していくことがポイントである。そのためにも母親のやっていること（子育て）を認め、ねぎらうことで改善されていく可能性は秘められている。

（9）子育て中にあなた自身が「遊びたい！」と思うこと

これは現代の母親の特徴的なものである。子どもをおいて自分が遊びに行きたくなったり、子どもをどこかに連れて行くときも、自分の行きたい所へ連れて行ったりする傾向がある。ここを理解せずに従来の母性意識にとらわれていると、小さな問題から「母親による子殺し」というような大きな問題に発展していく。「遊びたい」と言っている母親も、友達とランチをしたり、集まっておしゃべりをしたりすると元気になってまた子育てへと家に帰っていく。

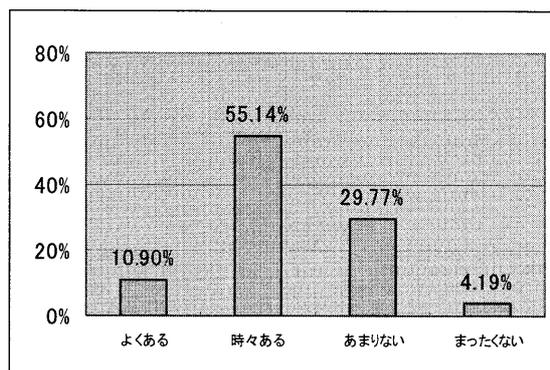


図9 「遊びたい」と思うこと

ちょっとした気分転換の場をもつことが子育てにおいて重要なことであると周囲が理解する必要がある。母親であっても遊びたい気持ちがあるのは当然のことである。

（10）夫が子育てにもう少し（あなたの考える範囲で）手を貸してくれれば、子育てはもっと今より楽しくなると思うこと

ここでの回答として、「夫に何かしてもらおう」というよりも「大変なことをわかってほしい、わかってもらっただけでいい」という回答（自由記述）が多かった。

以前の筆者の調査研究で「夫への愛着と子どもへの愛着とは関連性がある」ということが確認されている。そしてその夫や子どもへの愛着は母親の精神的ゆとりから生まれるものであり、そのゆとりには、夫との関係が大きく影響しており、母親の養育行動・態度に影響を及ぼすことが確認された。母子関係を考えるとき、夫を含めた視点で考えていかなければならない。

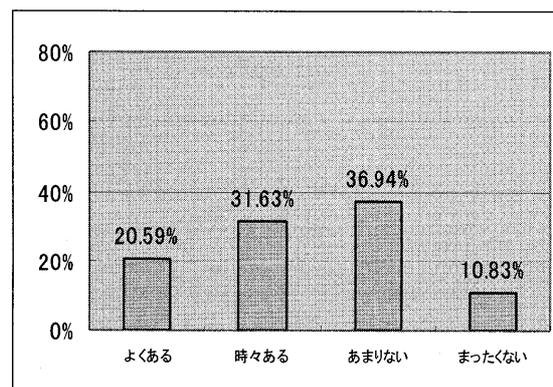


図10 夫の協力について

ここで「ない」が多いのは、自由記述の記載より推測されることとして、母親は、具体的な支え「手を貸す」ことよりも精神的な支えを夫に望んでいるからだと思われる。

(11) 子どもが可愛くてたまらないと思うこと

ここで「よくある」と答えた人は76.67%いた。そこでこの人たちについて、次の項目をピックアップしてみた（「時々ある」は含まない）。

(1)子どもに八つ当たりをしたくなる

(2)子どもが煩わしくていらいらする

(12)子どもを育てるために我慢ばかりしている（ここには記載がないが調査項目にはあり）

その結果を比較検討したものが次の図11-2～11-7の円グラフである。

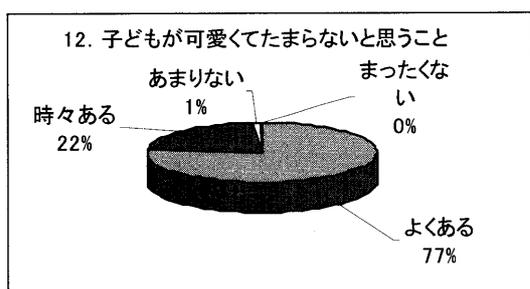


図11-① 子どもが可愛くてたまらない

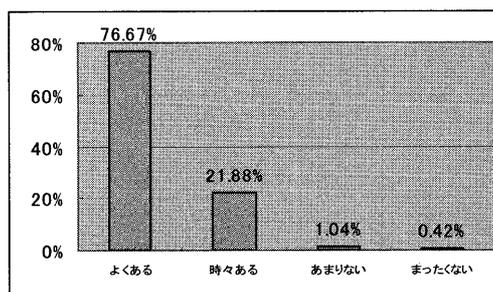


図11-1 子どもが可愛くてたまらない



「よくある」と答えた人の内訳

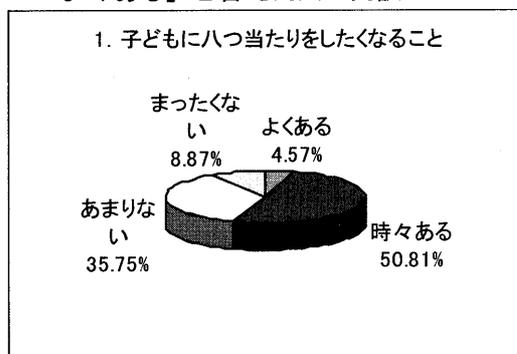


図11-2

回答者の内訳

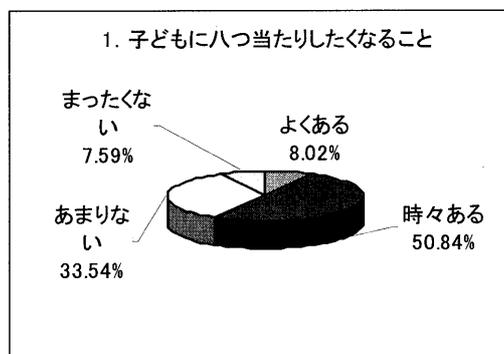


図11-3

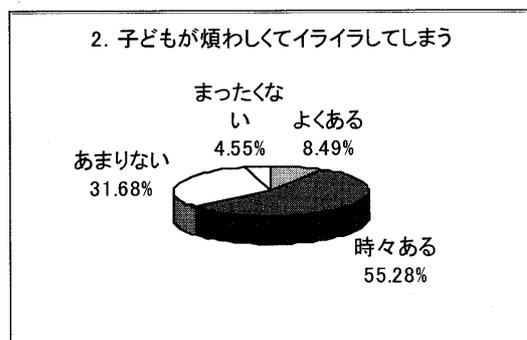


図11-4

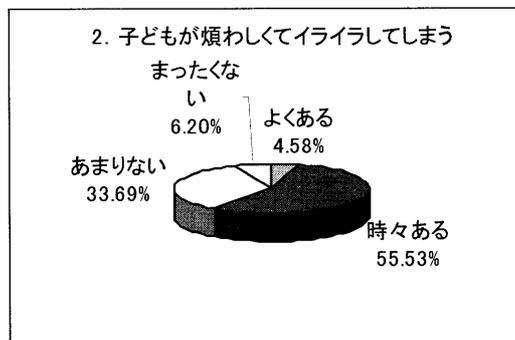


図11-5

子どもの育ちと母親の育児姿勢（2）

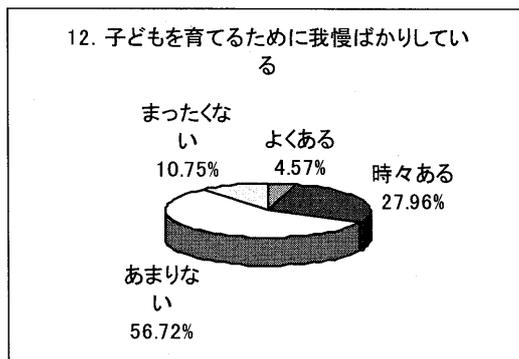


図11-6

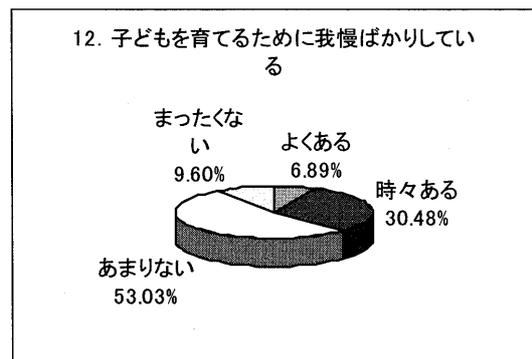


図11-7

以上のように非常に興味深い結果が出た。「子どもが可愛くてたまらない」と思うことが「よくある」と答えた人の中にも、やはり「子どもに八つ当たりをしたくなる」「子どもが煩わしくてイライラしてしまう」に「よくある」「時々ある」と答えた人は半数を超えていることがわかった。可愛いことと、その時の母親の感情とは別問題である。

つまり、「子どものことを可愛くてたまらない」と思うことがよくあろうとなかろうと、子どもに対して「八つ当たり」したり、「イライラ」したり、「我慢している」という意識はそんなこととは関係なくもつものだということである。

そういう感情を持つことはあり得ることだと母親がその感情を許容できれば、それだけでも母親の心は楽になるが、「そういう自分、そんなことを思う自分は駄目な人間だ」と自責の念に駆られてしまう。そのことで母親のストレスがうちにこもりためこむうちに、いつか子どもに対して暴力となって出てしまう。それで収まらなくなると、虐待へと発展していく。

3. 結 論

母親業は大変な仕事である。マイナスの感情をもってしまい、そんな自分を責めることもある。大切なことは、それをわかってくれる人、話を聴いてくれる人がいるか、その気持ちを受け止めてくれる人がいるかどうかである。

筆者は「子育てママのホッとひろば」^{註1}を年3回開催しているが、そこで母親たちは本音を話す。イライラや愚痴、本音を吐き出すことで今まで気づいていなかった諸々のことに気づき出す。例えば、「夫に文句ばかり言っているが感謝の気持ちは伝えたことがない」という気づきもそうである。そして「ひろば」からの帰宅後、「夫に『ありがとう』と言ったところ、夫の方からも『こちらこそいつもありがとう！』と言ってきて、ほのぼのとした気持ちになりました。」というメールが参加者から届いたことがある。このように、ちょっとした出来事が母親の養育態度に変化をもたらす。

また、働く母親と専業主婦との間にも子育てに関する意識の違いがあることもわかった。世間でいう「専業主婦は楽だ」というのがいかに間違っているかである。「常識」とは何なのか。「常識」と片付けず、子育てで悩み苦しんでいる人の声に耳を傾けていくことがいかに大切かということも今回の調査から改めて教えられた。

更に、数は少ないが今回の調査で少数の部類に属する母親のことも気がかりである。パーセンテージで見ると少数でも、数値からいけば決して少数ではない。中には十代で子どもを持った母親もいて、いろんな思いが交錯しているようである。そういう母親たちにも手を差し伸べ、支えていくことが今求められている。それには支える側が自分の中の「常識」とらわれることなく、視野を広く持つことである。いかに子育て中の母親をうまく支えるかは、支える側（支援者側）の問題でもある。

おわりに

調査にあたり、園長から「封筒がないと親は警戒して本音を書かない」と指摘された。そこで、調査用紙は封筒に入れて配布し、園には封をして提出するよう「アンケートへのお願い」にも明記した。しかし封をして提出した人はごく一部（ひと桁）であり、封筒から調査用紙がはみ出しているも大半が気にしていないようであった。また、調査内容に非常に敏感に反応する人もいたが、これもごく一部で、大半の人が大変協力的であった。「プライバシー問題」と言っている私たちの方が過敏になっているのかもしれないとも思った。

県内での調査の回収率が高かったのは、「高田短大からの調査」ということもあるが、もうひとつはやはり調査内容が母親の気を引くものでもあったのだと解釈している。なぜならば自由記述欄に今回の調査に対する励ましや好意的な言葉をいくつか書いて頂いたからである。連絡先としてメールアドレス、携帯電話番号、住所や自宅の電話番号を明記し、今後の協力の積極的な申し出も十数件に上った。こういう調査に対する母親の期待と関心が読み取れた。

これらの期待を無にしないためにも今後面接調査を行い、母親の育児姿勢を形成するその背景を浮き彫りにし、「特色G P」に採択されている本学の子育て支援活動の一環としてメンタルな面から役立てていきたい。

〈謝 辞〉この調査をおこなうにあたり、東京福祉大学非常勤講師で元幼稚園教諭・保育士経験のある加藤博子先生に、調査項目作成と愛知県内の調査にご協力いただいたことをここに感謝申し上げる。また、保育園・幼稚園の先生方、保護者の方々のご協力にも感謝申し上げるとともに、今後ご協力を申し出てくださった方々、励ましの言葉を添えてくださった方々もあり、多くの方々に大変お世話になったことを付記しておく。

註

- 1 「子育てママのホットひろば」高田短大で行っている特色G Pプログラムのひとつ

参考文献

- 橋本景子（1992）『養育行動・態度に関する父親と母親の認知的不協和とその影響』修士論文
橋本景子他（2005）『保育ソーシャルカウンセリング』建帛社
松村恵子（2005）『母性意識を考える』文芸社